

社、佛光寺派近江能登瀨善性寺と山津照神社などの關係がそれで、西派近江大浦蓮教寺と山王社の場合も同類と思われる。次に第二類には本來、寺自體の守護神として祭られたものが門徒教團にも禮拜される場合で、東派河内雁多尾畑光德寺の照曜權現、木邊派本山錦織寺の山王權現、下野高田專修寺の柳植神社などの例がある。更に第三類として、別に鎮守社を持たぬが、本堂等に守護神を安置して門徒に拜禮せしめるものがあり、東派出羽酒田淨福寺の八幡大菩薩、同近江上坂順慶寺の天満宮大自在天神などの外、佛光寺派近江大清水大樂寺の牛頭天王、東派三河野寺本證寺の龍神(カ)、同美濃居益聖蓮寺の八幡大菩薩なども同類と考えられる。

この様な眞宗寺院の鎮守神の問題については今後更に多くの事例を調査したいと思うので、ここで結論を出すことは差控えるが、敢て一つの見通しを與えれば、その殆んどが皆、單に寺の守護神としてでなく何等かの形で門徒團の鎮守であり禮拜對象であつた事實が明らかとなるのであつて、このことは何等かの意味で教團が形作られる上には、農民の村落における固い神祇信仰との交渉を無視出来なかつたことを立證する。近世における眞宗の鎮守社の存在は、その具體的な事實を示す一種の殘影であろう。従つてそれは、眞宗の從來の横の門徒教團から近世の縦の檀家教團への發展に伴う神祇關係の變化を暗示するであろう。また一方それは、比較的純粹な信仰形態を持つ近世の妙好人に於ても尙神祇崇拜を持つ事實や、或は平太郎熊野參詣に寄せて眞宗の神祇信仰を説く物語本、淨瑠璃本流行の基底を示すが、同時に中世における諸神本懷集、熊野教化集を始め、

特に村々の産土神崇拜やナオライ參列を奨める一宗行儀鈔等の出現の現實的基盤への見通しをも與えるであろう。

嘉祥作に歸せられたる無量壽義疏

村 地 哲 明

嘉祥には『大』・『觀』二經の註釋書があつて、この二經疏の眞撰については、古來から何人も疑問を挿まなかつたようである。しかし私の研究によると、『觀經疏』の眞撰であることに疑われないが、現存する『大經疏』については他師の『大經疏』が間違えられて、嘉祥作として誤傳されたもののように窺われる。その論證として、まず、嘉祥の『大經疏』は『長西錄』に始めて記載され、了慧の『無量壽經鈔』では屢々引用せられる。そして了慧の引用文と、現存する『大經疏』とを對照するに同一のものである。しかるに、これを『觀經疏』と比較してみる時、教判論・佛心論・宗致釋等數多くの點について、相違することを檢出しうるのである。

教判論においては、『大經疏』では次第教と偏方教とであるが、かような教判論は嘉祥の他の著書には見當らなく、剩さ『法華經』よりは『涅槃經』が勝れた經典として取扱われている。つぎに、佛身論についてみるに、『大經疏』は報身佛と見、佛壽は無量とせられている。しかし、『觀經疏』は應中に報・應の兩土を開く説であり、佛壽は有量説に歸している相違が見られる。又、二經の宗致釋を比較してみると、『大經疏』は『大經』の上巻は法藏の修因感果について示し、下巻は衆生往

生の修因得果に關して述べと説かれる。がしかし、『觀經疏』ではこれと相違する『大・觀』二經の宗教釋が明かされてゐる。それによると、『大經』では果である淨土について廣く明かして因行は略辯されており、『觀經』では逆に因行は廣く明淨土の果は略辯するという、相違が認められる。又、往生の因行たる三輩九輩は開合の異とする立場が『觀經疏』では詳述せられてゐるが、『大經疏』では『大經』の上輩を『觀經』の上中品とし、中輩は中上品と中中品に、下輩は下下品に配する相違が指摘しえられる。その他、二疏の組織及び用語の相違について、或は引用經典の比較等に關して、詳細に研究した結果によると、現存する嘉祥の『大經疏』は眞撰とは見做され難いように判断される。

かように『大經疏』が嘉祥作ではないとすると、本著の作者は何人に歸せられるであろうか。引用經典が舊譯のみであることは、玄奘以前の師であろうことを暗示する。又、『大經疏』では『涅槃經』を勝れた經典として取扱つてゐることは、涅槃學派に所屬する師の作であるかとも考察される。更に、この『大經疏』においては三界攝不説、西方と兜率との優劣論、逆誘攝不説等、これら重要な論説が漏されてゐる事實は、初期の研究によつて述べられたことを示唆するものとも見受けられる。なお、『大經疏』における次第教・偏万教という教判論が、すでに嘉祥の『彌勒經遊意』(『大正藏』三八・二六九)では舊諸師の學説として記載される點などより觀察するに、これは嘉祥以前の師の著書ではなからうかと考えられる。

佛教に於ける自殺の問題

菅原 大石

佛教に於ては自殺に自ら自身を殺す自殺と自ら他身を殺す自殺との二種の自殺があります。今余が此處に述べんとする自殺は二種の自殺の中第一の自ら自身を殺す自殺の研究であります。佛教では自殺を必ずしも罪惡とはしません。羅漢六種の中の第二の思法羅漢は所得の證果が退出せんことを懼れて恒に自害して無餘涅槃に入らうと思つてゐる。又、佛教には捨身と云う術語があつて佛道修行の爲めには身命を惜しんではなりません。報恩の爲め慈悲行の爲めには肉を割き身を捨つるを捨身供養と名づけてゐる。釋尊が前生に於て薩埵王子となつて餓虎の餌となり又雪山童子が、諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂の後半偈の爲めに羅刹に身を與えしが如きは法の爲めに身命を惜まざる捨身行は自殺と見て差支えはなからうと思ふ。又、宗祖が報恩を勸めんが爲めに佛祖の恩徳を嘆し給うて「如來大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし師主知識の恩徳も骨を碎きても謝すべし」とあるのは報恩の捨身行と云うべきであらう。噫々それなのに眞宗僧侶が自殺と云えば一概に罪惡と云ふ氣が知れない。然るに善見律に「比丘有り姪欲が心を亂すその心を制せんと欲するも制するを能わず自ら念じて言く我れ持戒具足す何んぞ以て戒を捨てて還俗せんや。我れ寧ろ死を取るべし是の故に普賢峯山の頂に上つて巖に投じて死を取る。佛諸の比丘に告ぐ自ら身を殺すこと莫れ身を殺す者乃至不食の者も亦突吉羅罪